

生活の中にある「無痛安産」

松本亜紀

はじめに

本稿の目的は、倫理研究所創立者である丸山敏雄（一八九二～一九五二）が戦後間もない日本において提唱した「無痛安産」と呼ばれる出産のあり方に着目し、丸山の出産観に影響を与えたと思われる思想（研究）や人物を辿ることである。

戦後の荒廃した日本において、「純粹倫理」と呼ばれる生活法則を発見・唱導した丸山敏雄は、一般に、痛くて当たり前とされる出産を「不自然」であると喝破し、ただ苦しみが無いというだけでなく、たとえようもない喜びの中に、玉のような愛児が産まれてくることを「無痛安産」と呼んだ。さらに、「無痛安産」を「新しいお産の仕方ではなく、人間が地球の上に現れて以来の正しいお産の仕方で、これが普通のお産」と断言し、それが生まれ出た愛児の人生のスタートにとって重要であることを指摘した。そして昭和二十三年にはその真髓をまとめた『無痛安産の書』を上梓する⁽¹⁾。

本稿では、丸山の出産観に影響を与えたと思われる思想や研究成果を概観しつつ、なかでも、丸山敏雄に先んじて「出産は自然で喜ばしいものであり、決して痛みを伴う苦しい経験ではない」という主張を行ったイギリスの産婦人科医、グラントリー・ディック・リード (Grantly Dick-Read 一八九〇～一九五九) の出産観と「無痛安産」の比較を通じて、「無痛安産」の本質を探究することを試みる。

さらに、現代の出産をめぐる動向を踏まえた上で「無痛安産」の現代的意義を再確認し、どうすれば「無痛安産」ができるのか、という問いについて考える契機としたい。

なお本稿では、混乱を避けるため、丸山敏雄が提唱した「無痛安産」とは異なり、麻酔などの薬剤を用いた分娩方法（現在の無痛分娩法）を、「無痛安産（法）」と表記する。ただし、引用箇所については原典通りに表記し注記を加えることとする。

無痛分娩の歴史——普及を担った女性たち

出産は一般に「痛い・苦しい・大変」のイメージで語られることが多い。現代の若い女性は子供を持つことに対しては肯定的な印象を持っているものの、出産に対しては先述したような否定的なイメージや産痛に対する恐怖心を持っていることが指摘されている⁽²⁾。

欧米では、こうした痛みの対処法として麻酔薬を用いた無痛分娩が広く普及しているが、日本は今のところ先進国の中では無痛分娩の普及率が低い稀有な国である。だが、近年、産痛や分娩恐怖感を排除（あるいは緩和）した無痛分娩法に対する関心は確実に高まっているようだ⁽³⁾。